

第 23 回 新潟県社会教育研究大会胎内大会  
令和 5 年度 下越地区社会教育研究集会胎内大会 参加レポート

氏名 山岸 則子

- 1 期日：令和 5 年 10 月 18 日（水）
- 2 会場：胎内市産業文化会館（※オンラインで前半の講演会参加）
- 3 参加者：県及び市町村社会教育委員、社会教育・社会体育・学校教育関係者等
- 4 研究主題：持続可能な地域づくりのための社会教育  
～これからの「人づくり、つながりづくり」～

【講演会】演題 「持続可能な地域づくり ～キャンパスを飛び出して現場に学ぼう～」

- ・地域おこしの 3 原則
  - ① 地理・歴史を知る
  - ② 何でも自分たちでやる
  - ③ 地域に誇りを持つ
- ・変えなければならないことと変えてはならないことをしっかり見極める  
→改革は楽観主義的に
- ・地域に支えられる食料・農業・農村  
→自助・共助・公助 この順番とバランスが大切
- ・地域と教育・研究・学生たちに望むこと  
理念 地域と暮らしに役立たないようであれば学問ではない  
行動 前例にとられない自由（人が歩いて道ができる）  
→問われて答えるより、質問・提案、よく観察し記憶する  
若い人たちの素朴な質問を無視しない、放置しない、否定しない
- ・地域活動の事例紹介  
行政・企業との連携協定  
学生たちの自主的な地域活動 20 を超えるサークルが活動  
マコモダケプロジェクト  
耕作放棄地で昔ながらの米栽培  
胎内里山ウエルカム MAP  
さつまいも「はるかなた」のブランド化 etc

感想 講演では「若い人」と「行動」「あらたな道づくり」などが非常に印象に残った。  
それは各地で共通して起こっている地域の課題解決や防災などにも通じるものがある。  
具体的に実践していきたとばかりであった。

## 第 23 回新潟県社会教育研究大会胎内大会 参加報告

2024.1.18 新潟市社会教育委員会議

会場：胎内市産業文化会館

日時：2023 年 10 月 18 日(水)

10:30～11:00 開会式・表彰式

11:00～12:00 講演 持続可能な地域づくり 新潟食糧農業大学長

## 【ここより参加】

13:00～14:40 第一分科会 地域から求められる社会教育の役割

上越市 部活動の地域移行等に関する社会教育の果たすべき役割

加茂市 行動する社会教育委員を目指して

第二分科会 今後求められる社会的包摂の実現に向けた取組 (参加分科会)

佐渡市 地域で考える「つながりづくりと社会教育のこれから

新潟市 社会的包摂の実現に向けた社会教育の在り方の検討

14:40～15:00 閉会式

## 佐渡市の内容

事業所が人手不足解消のために定時制高校生をアルバイト雇用すると共に研修会での発表をさせ、そこには地域住民も参加可能とした事例。

- ・短時間雇用の仕組みづくりと実践（通常勤務がしにくい特性を持つ子でも働ける。調整は大学生。常勤雇用者にとっても多様な働き方を可能に）。
- ・事業者が実施する勉強会の一部を地域に開放（講師をすることによる自信、従業員・住民の特性理解が進む）
- ・公民館開催高齢者向け PC・スマホ講座での活動（地域貢献と自信、相互理解）

企業にとって、就業者にとって、地域にとってよい方式として拡大中

## 質疑等

佐渡市：Discover Sado Island・地域振興局予算を用いて外国籍の人と活動

五泉市：新潟市の委員構成、年間の会議回数と費用弁償、部会分かれ方

三条市：新潟市在住外国籍市民懇談会座長として意見交換・調査、地域での懇談にうつった。それ以降、進んでいないのではないか。

上越市：障害者本人にどのように情報を届けるか。福祉課と教委、横の連携をどうするか。

## 助言 新潟県青少年自然の家所長

社会教育・社会教育委員の概説

第 4 期教育振興基本計画（教育の進むべき方向性 ・持続可能な社会の創り手の育成 ・日本社会に根差したウエルビーイングの向上 ・目標⑦～⑩が関連）

それぞれの持ち味と地域の特性を生かして活動してほしい。

## 閉会式 来年は柏寄

以上 雲尾周

## 第23回 新潟県社会教育研究大会胎内大会 令和5年度 下越地区社会教育研究集会胎内大会 参加レポート

氏名 司山 園美

- 1 期日：令和5年10月18日（水）
- 2 会場：胎内市産業文化会館
- 3 参加者：県及び市町村社会教育委員、社会教育・社会体育・学校教育関係者等
- 4 研究主題：持続可能な地域づくりのための社会教育  
～これからの「人づくり、つながりづくり」～

5

講演：新潟食料農業大学 学長 渡辺好明 氏  
持続可能な地域づくり～キャンパスを飛び出して現場に学ぶ～

食と農の視点から地域社会にどう入っていけばよいか？

むら（←ひらがな） 成り立ちは室町時代の中頃～明治まではほとんど変化なし。  
神社を中心に農業集落（2件以上の農業者が経済的に社会と関わっていることを言う）が成り立ってきた。1農業集落1神社でむらが神社を作って結束を固めてきた。

日本の農業、農村は大きな変貌の中にあり、また「多様に分化」している。  
農業と農業関連業で仕事をしていく（経営者）と趣味や生きがいで農業をする人の共存で総生産が増やし安定させ集落を支える必要がある。  
時代の流れとともに変えなければならないことと変えてはならないことをしっかり見極める必要がある。

むらが発展する原則

- 1：地理・歴史を知る  
ただ勉強するだけではなく、資源を知る、ものだけでなく出来事も知る。  
なかったら作るという発想も必要。
- 2：なんでも自分たちでやる  
自分で作ったものは微調整がきく。  
5年経ってはじめて自分のものになる。  
人に教えられる、伝えられる。
- 3：地域に誇りを持つ  
こんないいところだよ！と言えないと人は来ない。  
お金ではなく誇りを失ってはならない。

地域に支えられる食料・農業・農村 Community Supported Agriculture=CSA  
自助・共助・公助

まずは自分のことは自分で→近くの人が見守る→動く

ほっとくようでほっとかん ほっとかんようでほっとくが大事。過保護にするとだめ。  
桜が育とうとする一人の力を伸ばすのが桜守の役目。  
だめだ～ではなくどんな些細な質問でも、それ面白いね！一緒に考えてみようが教師の役目。

地域と教育・研究・学生たちに望むこと

農学→フード（食）→ビジネス ここまで繋げる。

地域と暮らしに役に立たないようでは学問とは言えない。

「自由」 勝手にするということではなく事例にとらわれず行動すること！（人が歩いて道ができる）他社の考えや行動をを尊重する「多様性」や好奇心の中で生まれる「創造性」を大事に。

分科会：第2分科会

事例発表 前半／佐渡市（以下の内容） 後半／新潟市（省略）

地域で考える「つながりづくりと社会教育のこれから」

コロナ禍で経済活動が自粛する中人手不足に悩み、他方に相談している際に会った通信制の高校の先生との出会いから始まった取り組み。

活動の概要

短時間就労の仕組みづくりと実践

→生徒たちの特性に合わせた働き方を構築したが、結果的に介護や育児をしている方、大学生にとっても働きやすい環境になった。

→やめさせないで、企業がしっかり面倒をみてくれたことで自身のついた生徒が増えた。次の事業所へいくきっかけになった生徒もいた。

事業者が実施する勉強会の一部を地域に開放

→一緒に働く従業員からコミュニケーションの苦手な生徒たちの対応に戸惑うという意見をもらいそれを機に障害などについて考える機会を設けた。勉強会を従業員のみならず、地域へも広げた。

→月一回の勉強会では学びを深めるために不足があると感じ、短時間で回数を増やすことに。

「みんなが塾」と題し従業員が主に講師になって輪番制で10分発表、10分質疑応答、意見交換をするようになった。学びの習慣化、地域での学びの仲間作りに。

公民館などが開催する高齢者向けのパソコン、スマホ講座での活動

→企業、高校生の関わりから高齢者の方の講座アシスタントの生徒の派遣の話へもつながったことで、生徒たちが地域に出る機会が増えた。高齢者の方と関わる中で自己有用感、自己肯定感を持てるようになった。

→地域での学びの機会が活発になることで高齢者の方の仲間作りにもつながった。

事業者は付加価値向上を考えるために働く地域のことを考えた取り組みの必要があり、地域とともに学び成長していく姿勢を持つことが必要。

## 第23回 新潟県社会教育研究大会胎内大会 令和5年度 下越地区社会教育研究集会胎内大会 参加レポート

氏名 角野 仁美

- 1 期日：令和5年10月18日（水）10:30～
- 2 会場：胎内市産業文化会館
- 3 参加者：県及び市町村社会教育委員、社会教育・社会体育・学校教育関係者等
- 4 研究主題：持続可能な地域づくりのための社会教育  
～これからの「人づくり、つながりづくり」～

### 5 講演：新潟食料農業大学 渡辺好明氏

「持続可能な地域づくり～キャンパスを飛び出して現場に学ぶ～」

#### <印象的な内容や問い>

- ・食と農の視点から、地域社会にどのように関わっていくか？
- ・平仮名の「むら」・・・室町時代～ 定義は農業集落（2件以上の農家・農業者があって、経済的な結びつきがあるところ）71,000 あった→現在は 1/10 に減少
- ・漢字の「村」・・・行政区
- ・日本の農村は大変貌期→「変えなければならないことと、変えてはならないことを見極める」
- ＊農村の望ましい姿：「**経営者**」と「**楽しみで農業する人**」の共存
- ＊水、土地、水路：地域社会が健全な形でまわっていない
- ＊多様な対応の仕方が必要、デュアルライフ・・・関連人口、関係人口を増やしていく
- ＊地域おこし協力隊、現在 6000 人いる

#### <地域おこしの三原則>宮本常一

- ① 地理・歴史を知る・・・地理（資源）・歴史（過去の教訓）を知ること。探して無かったらストーリー（資源）をつくれれば良い。
- ② **何でも自分たちでやる**・・・コンサルに頼まない。自分でつくったら微修正がきく  
★中村哲さん：「5年たって初めて自分のものになる」自分でより良くする
- ③ 地域に誇りを持つ・・・自分の地域に誇りをもたなくては、人はこない  
★西ドイツの奇跡の復興：お金、やる気ではなく「誇り」がなくなったら全ては終わる

- ・「地域計画づくり」が始まっている・・・人、金、資本をどのように活用していくか？
- メモ：自分たちでやる「プロセスデザイン、ファシリテート」をやりたい
- そのマインドをもつ原体験、教育の場をつくる（自分で考える、自分でやってみる）

#### <地域に支えられる農業>

- ・自助、共助、公助、この順番とバランスが不可欠
- 上杉鷹山、ケネディ大統領「国になにかしてもらうのではなく、国で何ができるか」
- ＝ほっとくようではほっとかん、ほっとかんようではほっとく（生きようとする力を引き出す）
- ＝桜守の仕事

<学生に大切にしてもらいたい行動>

そもそも天下に道は無い、前例にとらわれない“自由”

他社の考えと行動を尊重する“多様”

好奇心に裏打ちされた“創造”

→問われて答えるより、質問・提案。よく観察し「記憶する」

・・・若い人たちの「素朴な疑問を無視しない、放置しない、否定しない」

一緒に考えてみよう→生徒が自分で結論を出す

・オーラル・ヒストリーを聴く：好奇心がなくては、進歩はない

・現場に飛び出して、話をきく必要がある。

・新潟県は「水田」。越後平野は元々、水。

・水田は、新潟の宝物。水田がなくなると、耕作放棄地に。村がなくなる。

・水田でしっかり米をつくり、海外に出す。世界中に困っている人がいる。

## 6 分科会でいただいたご意見・講評メモ

・外部リソースを活用した、外国人支援を検討できそう

使える新潟県の予算をうまく掛け合わせる（社会教育以外の予算を活用する）

・新潟市在住外国懇談会をやっていた、人材の循環が必要。

・社会教育委員に期待される役割・・・県内、342名。

計画を立てる、地域の未来像を具体的に描く

・個人の幸福—社会の発展／生涯学習と社会教育

・第4期 教育振興基本計画「持続可能な社会の創り手の育成／日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上」

・子どもたちが多様な体験を受けること／部活動の地域移行の視点

・まちづくり、福祉、首長部局、関係各課との連携協力

誰を対象に何をどのように、変えていくのか？

## 7 所感

\*農業も、人づくりも、お金になりにくいところに対して、どのようにアプローチできるのか。

\*社会教育委員は何ができる？→何を、どこまで、になっていけるのか？

\*社会教育研究大会の在り方を見直したい。インプット型ではなく、社会教育らしく「つながりづくり・対話」を重視した、新しい学びの在り方を体現する場にできれば良いのでは。

【研究大会参加報告書】

## 第35回新潟県社会教育委員会大会 令和5年度新潟県社会教育委員会大会に参加して

### 1 研究主題

持続可能な地域づくりのための社会教育 ～これからの「人づくり，つながりづくり」～

### 2 日 時

令和5年10月18日（水）10:30～15:00

### 3 会 場

胎内市産業文化会館 （※ オンライン参加）

### 4 内 容

#### （1）開会式・表彰式

- 会長挨拶や県教育長祝辞等があった。
- 令和5年度新潟県社会教育委員連絡協議会表彰で，6名の方が表彰された。

#### （2）講演会

- 演題  
『持続可能な地域づくり ～キャンパスを飛び出して現場に学ぼう～』
- 講師  
新潟食料農業大学 学長 渡辺 好明 様
- 講演概要
  - 地域おこしの三原則，変貌する地域社会
  - 新たな地域コミュニティを求めて
  - 地域に支えられる食料・農業・農村
  - 地域と教育・研究・学生たちに望むこと

#### （2）事例発表

- ① 佐渡市『地域で考える「つながりづくりと社会教育のこれから」』
  - 地元，製造業者と通信制高校の運営者が主体となり，子どもたちの社会参加や，主に高齢者を対象とした地域活性化の取組についての事例だった。
  - 通信制高校に通う，コミュニケーションが苦手な若者でも，製造業なら短時間就労できる仕組みづくりや，事業者が実践する勉強会の一部を地域に開放したり，公民館が開催する高齢者向けパソコン・スマホ教室に講師として生徒が参加したりする取組が紹介された。経営者に地域の社会教育に興味関心を抱いてもらえるような取組を今後も増やしたいとの言葉が印象的だった。
- ② 新潟市『社会的包摂の実現に向けた社会教育の在り方の検討』
  - 新潟市では，第35期の社会教育委員が「子どもや若者の参画を促すネットワーク」と「共生社会の実現に向けた学びの在り方と取組のネットワーク」の2グループに分かれて，調査研究活動を進め，今年度末には建議としてまとめ，市に提言することになっており，その調査研究についての報告があった。
  - 角野委員と司山委員が，とても分かりやすく，堂々と新潟市の取組を発表してくださいました。参会者から，新潟市の取組に大きな称賛をいただいていた。

#### （4）閉会式

### 5 感 想

- 渡辺学長の落ち着いた中にも熱い思いのこもったお話や，佐渡市と新潟市の発表を聴いて，地域づくりや社会教育に対する情熱を感じた，有意義な研究大会でした。

（報告＝竹田暢美）